プロティノスの
「天の動きについて」II-2-(14)

1
1 なぜ円く動くのか(「円く動くはプティマイオスJ34 にある言葉)

2 それはヌース(英知)をまねているからだ

3 で、その動きは何の(動き)か、魂のか、身体のか

4 しかし魂がそれの内にあり、それに向かっているということは、どういうことなのか

4 魂が行こうと急いでいるのか

4 また魂は連続的でない動きの内にあるのだろうか

4 また魂は自分を運びながら、自分と一緒に(天を)運んでいるのだろうか

5 しかし、一緒に運ぶのであれば、魂は今はもう運んではいないはずで、すでに運び終わった、つまり天をむしろ静止せしめているはずで、つねに円く動かすはずはないだろう

6 魂自身も静止するだろうから

7 いやむしろ、魂が動いているとしても、どこかく動く場所的にではないだろう

7 しかし、それでは魂はどのようにして場所的に動かすのだろうか、魂自身は別の仕方で動いている、とすると

8 いやそれは、多分円い動きもまた場所的ではないからだ

8 あるいは、それがもし場所的なものであれば、付随的にのみそうなのだ

9 では、それは(本来は)どんなものなのか

10それは、自己自身に対する、自己知覚的で、自己直知的で、生命力に溢れ、いかなる点でも外部へ、あるいは他の場所へ向かわない動きである

11なぜなら、すべてのものを包括していなければならないからである

12というのは、生きものの支配的部分は、包括し、一つのものとするからである

13ところが、もしその部分が静止しているならば、それはそれらに生命を付与しながらも包括することができないだろうし、また(天は)身体をもっているのに、自己の内部の諸部分を、生きものとして保全することもできないだろう

14 なぜなら、物体の生命は運動なのだから

15しかしそれでは、天の動きは場所的であるとしても、それは天が自分に可能な仕方で、つまり単独の魂としてではなく、魂をもつ物体として、生きものとして、動いているからであろう

17 したがって天の動きは、物体的な動きと魂的なそれとから混成されたものである

17 つまり、物体は本性上まっすぐに動くが、魂は(動きを)抑制するので、この両方から、動いてもいるし止まってもいるもの(同一場所での円運動)が生じるのである

20しかし他方、円運動が物体の運動だと主張されるのであれば、どうして(可能か)、火を含めてすべての物体が直進するものであるのに

21 いや、物体が直進するのは、その物体が定められた場所へ到達するまでなのだ

22 なぜなら、物体は定められた通りに、本性にしたがって静止する、定められた所へ運動するように思えるのだから

23 では、(天の火は)到達しているのに、どうしてそこへじっと止まっていないのか

24 それは、火の本性が動きに依存するからだろうか

24 とすると、この火は、円く動かないがあ動かないには、まっすぐに動いて、離散することだろう

25してみると円く動かなければならぬわけだ

26 しかしそれは、摂理のわざだ

27 いや、火の内に摂理から(性質が)与えられていて、その結果、火がかの所へ行き着いたならば、それ自身から円く動くことになるのだ

28 いやそれとも、天の火もまっすぐに動くことを欲していはするのだが、場所がもうないので、いわば横に滑り動くという仕方で、動ける場所内で行きつもどりつしているのであろう

29 なぜなら、天の火は、自分の向こう側には場所をもっていない

30 そこが最先端の場所なのだから

30 そこで天の火は、現に自分が占めている場所の内で走る

30 それは、それ自身がそれ自身の場所となっているのだが、しかしそこへ止まっているためにではなくて、運動するためにそこへやって来たのである

33 それにまた、円の中心は本性上静止するものであるが、他方外側の円周が静止しているならば、これは大きな中心であろう

34 だから、生きてもおり、本性的な状態にありもする物体(宇宙)のばいには、まして円周は中心のまわりをめぐるであろう

35 なぜなら、そのようにすれば、円周は中心へ傾く(向かう)ことになるのだから

36 つまり、決下して中心と一つになるのではなく

——それだと円を減ぼすことになるから——

そうはできないので、渦巻くことによって(中心へ向かう)のである

37 なぜなら、この仕方によってのみ、円周は自己の欲求を満たすことができるのだから

38しかし他方、魂が導いて回転させるのだとしても、疲れることはないだろう

38 なぜなら、魂は天を引きずるのではないし、本性に反するように(回転させる)でもない

39 なぜなら、「本性」とは全体的な魂によって定められたことなのだから

40 それにまた、この魂は、その全体があらゆる場所に偏在しており、世界全体の魂であるから部分ごとに分断されてはいないので、この魂は天に対しても、天にできる仕方で、あらゆる場所にあることをゆるす

42 そして天にできるのは、すべてのものを順次たずね、訪れることである

43 というのも、もしどこかある場所で魂が静止しているのだったら、天の火はそこへ行って静止したことであろう

44しかし実際には、魂が全体の魂であるので、天はあらゆる場所で魂を欲求するのである

45 すると、いつになっても遠しないのだろうか

46 いや、この仕方で、天はいつも遠しているのだ

46 いやむしろ、魂の側から天をいつも魂自身へと導いて、このいつも導くということにおいて、いつも天を動かすのだ

47しかも他の場所へ動かすのではなくて、魂自身へ向かって、同じ場所で動かすので、まっすぐにではなくて、円く導くことになり、どこであろうと行く先々で魂をもつことをゆるすわけである

48 仮にも魂がじっと止まっていて、ちょうどそれぞれのものが止まっているような場所に、そこにだけいるとすれば、天も静止することだろう

50 ただし外へではない

50 だから、魂がどこであろうとそこにだけ止まっているのではないとすれば、天はあらゆる所へ行くだろう

51 したがって円く(動くの)である

2
1 では他のものはどうなのだ

2 いやそれは、他のものは、それぞれが全体ではなくて一部分であり、部分的な場所によって束縛されているからだ

3 他方、かのものは全体であり、いわば場所であり、何ものもそれを妨げない

4 では人間はどうか

4 なぜなら、それ自身がすべて(世界)であるのだから

5 世界から生じたものである限りでは、人間も一部分であるが、人間が自己自身である限りでは、固有の全体である

6 さてしかし天は、どこにあろうとも、あらゆる場所で魂をもつのだとすれば、どうしてくるくるまわる必要があるのか

7 それは、魂が単にそこにだけいるのではないからだ

8 それにまた、魂の能力は中心のまわりをめぐるとすれば、この理由でも、天は円く動くだろう

9 魂のばあいには、中心とは魂のその他の部分がそこから出て来る所であるが、物体のばあいには、場所的な意味である

9 ただし、「中心」を物体のばあいと魂の本性のばあいとで同じ意味に解してはならない

10 つまり、あそこに中心があるように、ここでも中心がなければならないが、こちらだけが球形の物体の中心なのである

地動説である

10 だから「中心」を類比的に理解しなければならない

11 つまり、前者がその中心のまわりをまわるように、後者(物体)もそうするのである

12 さてそこで、魂に中心があるとすれば、魂は神のまわりを走りめぐり、彼の周囲で彼を愛し、自分にできる限り神のまわりに自分を置くだろう

13 なぜなら、すべてのものが神に依存しているのだから

14しかし魂は神のもとに行けないので、神のまわりをめぐるわけである

16 では、どうしてすべての魂がそうしないのか

17いや、それぞれの魂が、それぞれのいる場所で、そうしているのである

17 では、なぜわれわれの身体もそうしないのか

18 それは、まっすぐに動く性質のものがわれわれに付着しており、またわれわれの欲求が他のものに向けられており、またわれわれの球状の部分(頭)が滑りが悪いからだ

18 なぜなら、土を成分としているのだから

19 他方、あちらの方は(成分が)細やかで動きやすいので、随行するのである

20というのも、魂が動いている限り、それがどんな運動であろうと、いったいどうして天が静止するだろうか

21 おそらくわれわれにおいても、魂のまわりにある気息は、それ(円運動)をしているのだろう

21 なぜなら、神がすべてのものの内にいますならば、神とともにありたいと望む魂は、神のまわりで動くほかはない

23 神はどこか(特定の場所)にいるのではないのだから

25 それにまたプラトンも星々に、全天とともに行なう求刑の運動を認めただけでなく、それぞれの星がその中心のまわりで行なう運動(『ティナマイオスJ40a)も認めている

26 というのも、それぞれの星が、それぞれの場所で神を抱擁して歓喜するのである

27 ただし、各自の考量によってそうするのではなく、本性上の必然性によって

3
1 また、このことは次のように言われてもよい

2 魂の或る力が、これは末端の能力であるが、大地から始まって、全体を貫いて縫い込まれている(『ティマイオス』36e)」

3 また別の力が、これは知覚する本性をもち、思考する理性をも与えられているのだが、上方で、諸天球の内に自己を保持し、いわば天球に乗って運ばれている

5 そしてこの力は、先のあるの力に自分の内から力を与え、これをより多く生命に溢れるものとする

地動説である

6 さてそこで、下の力は上の力によってくるりと取り囲まれていて、後者によって動かされる

6 また上の力は、下の力のうちで天球にまで走り上がって来たすべてのものの上に座しているのである

9 そこで、上の力がくるりと取り巻いていて、下の力は上の力の方へ傾きそちらへ向き直る

10 そしてこの向き直りが、下の力がその内で編みめぐらされているところの物体(この世界)を回転させるのである

11 なぜなら、一つの球において、どこかの部分が、どのようにであろうと動かされるならば、とりかくそれが動かされさえすれば、それがその内にあるものを揺り動かすであろう

13 そこで、その球に運動が起きる

14というのは、われわれの身体のばあいでも、魂がたとえば歓喜した時や、何か善いと思えるものに出会った時に、魂はちがったふうに動くのだが、身体にはまさに場所的な運動が生じるのである

16 だから、かの所で魂が善の内に入って、よりいっそう知覚的になり、善なる者へ向かって動いて、(天の)身体を、かの所で自然であるように、場所的に揺り動かすのである

19 また知覚する力も、上方から、これもまた善なる者をとらえて、楽しみながら自己のものを追求しつつ

——善なる者はあらゆる場所にあるので——

あらゆる場所へ向けて一緒に運動する

21 すなわち、それは静止していて動いているのである

21 しかし英知は次のように動く

21 なぜなら、それはそれ自身のまわりを動いているのだから

22 だから、同じようにこの世界もまた、円く(動くこと)によって、動くと同時に静止しているわけである